Mikiko Terauchi

工学部建築学科・准教授

寺内美紀子

九州大学工学部 卒業。東京工業大学大学院修士課程修了。同大工学部技術補佐員を経て同大大学大学院助手。アトリエ・ワン管理建築士、寺内美紀子建築設計事務所代表、茨城大学工学部助教授、准教授を経て、現職。同学科開設以来、初の女性教育者。

ハードな研究生活と結婚生活の分かち合い

Message to Students!

建築は知れば知るほど深いものがありますが、常に新鮮な見方も必要。発想やひらめきという点では素人も玄人も関係なく、みんなで意見を言い合うことがよい建築につながります。もちろん、上手下手、向き不向きもありますが、少なくとも大学を卒業するまではセンスではなく、やる気と努力が全て。興味を持っていろいろな建物を観に行ったり、写真を撮る努力をしてほしいですね。また、女性にとってはまだまだ開拓が必要な分野で、結婚、出産、育児や親の介護を機に辞めてしまう女性がたくさんいますが、生活の器である建築は、そうした経験もいつか必ず役に立つはずです。私はいろいろな立場の人が設計に携わることが建築文化のためによいと考えています。だから仕事は辞めないで、女性特有の楽天的な発想も利用して、何とかうまく乗り切る道を探してほしいですね。

自分で設計した家で週に1回は夫と温かいごはんを食べ1週間分の話をします

独立して事務所を構えた数年間を経て、教職のほうが向いているとの考えに至りました。どんな建築家でも決してひとりで設計することはないので、教育者として学生には公平にチャンスを与えるように心がけています。だからプロジェクトに対しての関わり方も学生の自由。なるべく建築設計の現実を見せて、学生だからといって何かを大目に見ることもない分、学生が先生の言うことを聞く必要もないと感じています。

建築学科に所属し より深く感じる地域のニーズ

建築のなかでも意匠設計が専門。設計活動が研究にあたります。街なかの設計事務所や建設会社でも設計はしていますが、私の場合は建築をよりよいデザインをするための意匠論を研究することで、実際の建物や都市空間の原理原則を調べ、単純に好き嫌いという直感よりも論理的に設計にアプローチしています。ただ、設計そのものの作業は設計事務所等と変わりません。発注元は個人の場合もあれば、地方自治体の場合も。公共施設は地域のさまざまな人の話を聞いてワークショップをやりながら設計案をたたいていくので、時間をたっぷりかけてクライアント側の要望を細やかに聞きながら造っていけるのが、大学での設計の強みですね。以前は茨城大学の土木学科にいましたが、信州大学では建築学科に所属しているので、より建築を求めている学生やクライアントに出会えるようになりました。建築系の知り合いも増え、深く付き合えるので、信州大学に来ることができてよかったと思っています。

モラトリアムから ディープな建築の世界へ

親が医者だったこともあり、高校時代は何となく医学部をめざしていました。ところが共通一次試験（現センター試験）を受けた結果「医学部に受からないだろうし、私は浪人してまで医学部に行きたいのか」と疑問に思ったのです。そこで、子どもの頃から好きだった絵を描くことと理数系の知識を活かせる仕事を考えて建築の道へ。卒業時はバブル期で就職率がよかったことから、まだ遊んでいたい、という軽い気持ちで東京の大学院に進みました。まさにモラトリアムですね。しかも当時は男女雇用機会均等法が施行された頃で、女子でも総合職や専門職に入れる時代になったので、2年経ったらゼネコンの設計部にいこうかな、と深く考えていませんでした。

しかし、進学先はとても真剣に建築に取り組む学科で、博士課程から設計をやったり雑誌に寄稿をしたりと、自由に力を発揮する先輩たちを見て衝撃を受けたのです。そのうち研究室でも大きなプロジェクトに携わるようになり、24時間みんなで寝食をともにする多忙生活のなかで、夢を描くというよりは、先生について建築をもっと知りたいな、と思っているうちに10年以上が過ぎていました。

10年経ってようやく理解され 20年目に単身赴任

博士課程2年の時に結婚し、その後は助手として研究室に残っていました。先生からは「建築家はどれほどハードな生活なのか、理解してもらったあとで結婚したほうがよい」と反対されましたが、24時間みんなが一緒の生活に距離を置きたかったのです。それに夫は建設系の会社に勤めていたので、この仕事をわからなくもない。そう思って踏み切った結婚生活でしたが、実際、10年ほどは生活のペースが掴めずに悩みました。夫は当時の私を振り返って「額縁のない感じだった」と言います。何になりたいかもわからないほどフワフワしていたんでしょうね。10年経ってようやく私がやりたい建築の仕事を理解されるようになり、「うちの妻は毎日終電で帰ってくる」とか「ごはんを一緒に食べるのは週に1回でよしとしよう」と納得してもらえるようになりました。結婚20年目の年に単身赴任で長野に来てからは別居なので、とことんかわいそうだとは思いますが、今は自分の研究室なので比較的時間も自由になります。その分、どんなに忙しくても週に1回は東京の自宅に帰り、ふたりで温かいごはんを食べようと決めています。自ら設計した自宅はオープンキッチン。私は料理をし、夫はほかの家事をしながら、ふたりで1週間の報告をします。今はそんな時間が楽しみになっています。